

シンポジウム：EBMに基づいた上気道における感染症対策 鼻副鼻腔疾患について（抄録）

石戸谷 淳 一

横浜市立大学医学部耳鼻咽喉科

EBMという概念が我々耳鼻咽喉科領域でも話題になっているが、狭義のEBMに基づく耳鼻咽喉科診療が定着するにはいくつかの障害があろう。その一つとして、EBMの概念・手法を十分に理解し日常診療に利用している耳鼻科医はまだ少数であろうし、さらに、耳鼻咽喉科領域に関するいわゆるEBMのエビデンスが少ない事も原因であろう。

EBMのエビデンスをさがす医学データベースの代表として、The Cochrane Library, Clinical Evidence, Up TO Dateなどがあるが、鼻副鼻腔疾患に関してはEBMに用いられるシステマティック・レビューが少ない。急性副鼻腔炎（急性上顎洞炎）に対する抗菌剤の有用性を示すエビデンスはそれぞれのデータベースにみられるが、耐性菌を考慮するとエビデンスは乏しい。また、日本における慢性副鼻腔炎治療に用いることができるシステマティック・レビューは、上記のデータベースにはない。

急性副鼻腔炎の場合、耐性菌が問題となっている現在の日本において、どのような抗菌剤がファースト・チョイスとして適当であり、その投与期間はどの程度か、さらに上顎洞穿刺・排膿の有効性と適応をどのように位置づければよいか、等々。一方、慢性副鼻腔炎に関しては、マクロライド療法の有効性は日常よく経験されるものであるが、マクロライドの量や投与期間また手術適応をどのように決めればよいか、吸入療法や鼻処置の有用性は証明されているか、等々が問題となろう。

鼻副鼻腔疾患は単に感染症としてだけでは説明しにくく、鼻腔形態の異常やアレルギー性炎

症の関与等が成因・病態を修飾している。これらを考慮しEBMの考え方に基づいた今後の対応について考察する。

連絡先：石戸谷 淳一

〒232-0024 横浜市区南浦舟町 4-57

市民総合医療センター（市大センター病院）

TEL 045-261-5656 (代)